

宮川 翠雨（みやかわ・すいう）

1、プロフィール

俳人、書家。青森県師範学校卒業。花田哲行に師事、「ほそみち」「石楠」に投句。青森俳句会機関誌「暖鳥」同人、書家鈴木翠軒に入門。受賞作多く、のち雨声会を主宰する。

<生没>

1912(大正元)年9月28日～1987(昭和62)年1月12日

<代表作>

第1句集『初硯』昭和60年刊行。第2句集『古端溪』平成2年刊行。

<青森との関わり>

青森市生まれ。青森県師範学校卒業後、市立橋本小学校、県立青森高等女学校、県立青森高校などに勤務。

2、作家解説

宮川翠雨(本名、宮川武弘)は大正元年9月28日、青森市に生まれる。

昭和7年青森県師範学校卒業。

両親の躰はきびしかったが母は日蓮宗で仏教的な考え方のもとに勉学のほか掃除、手伝いなどもきちんとさせた。しかし父は、学生は勉学をし、時にはスポーツなどで楽しむのがよいという考えの人であった。この両親の教育観がのち翠雨の人生に大きな影響を与えた。

俳句との出会いは絵との出会いから始まった。師範の付属校在学中、絵の教師は今純三であり、彼の人格に深く傾倒する。人生いかに生くべきかで占められていた翠雨は写生を主とする絵画から書道へと移ってゆく。人間の豊かな心情についても考えるようになる。その頃、高松玉麗、花田哲行に俳句を勧められ、「屋根からの坂となりけりスキーの子」が増田手古奈の句会で「天」となる。

師範学校卒業後、花田哲行の「ほそみち」の句会に出席、翌年「石楠」の臼田亜浪が公会堂での句会に立ち寄り、宿題の「とんぼうを嚙んでしまひし馬の顔」が天位をもらう。俳句への道はこうして開かれ、休んでいた書道の世界が見えてくる。

昭和15年上京を決意。記念に『向日葵』を千葉菁実、福田空朗らと7人集として刊行。

昭和20年1月県立青森高等女学校に赴任、吹田孤蓬と会う。孤蓬は青森俳句会の機関誌「暖鳥」の代表であった。昭和21年2月創刊時の同人は孤蓬、柿崎無為、西沢赤子、新岡青草、成田千空、宮川翠雨ら26名であった。創刊のニュースは県内俳壇に伝えられ、各地から続々集まってきた。この年翠雨指導の青高女のグループが「青高女支部」として発会、のち昭和26年の寺山修司、京武久美らの台頭を促す。

昭和16年上京した翠雨は鈴木翠軒門下生となる。昭和28年「寒雷」に投句。昭和43年日展審査員、青森県文化賞受賞、昭和48年「陸」同人、青森県俳句大会知事賞、49年青森県褒賞、53年『翠雨雑記』刊、54年「河口」創刊、56年パリにて個展、60年句集『初硯』刊行、62年1月12日死去。

日展評議員、翠心会々長、雨聲会主宰、現代俳句協会々員。

3、資料紹介

○随筆集『翠雨雑記』

図書

1978(昭和53)年8月31日

212 mm × 150 mm

随筆集としては初めてであり、出版が決まったあとは本の装画のことで工藤甲人に依頼し、快諾を受け、著者自身が喜んだ。内容は崇敬する書の師鈴木翠軒との交流、人柄など大方を占めるが、教育雑感、俳句、書道のこと、人物評など多岐にわたる。

○『句集 古端溪』

図書

1991(平成2)年5月20日

215 mm × 150 mm

第1章いろは(昭和10年～昭和27年)〈ほそみち、石楠時代〉第2章無邊(昭和28年～昭和47年)〈寒雷時代〉第3章雪月花(昭和48年～)〈陸時代〉と時代の特徴がよく出るように編集されている。編集責任者菊池翠汀、発行人宮川久。装丁鎌田雨溪。